

# 啓蒙の再生と普遍道徳の役割について

## On the Role of the Universal Moral in the Regeneration of the Enlightenment

丸山 博道

Hirromichi MARUYAMA

啓蒙が神話へと退行して行く原因は、ことさら逆行することを目的として考え出された、国家主義的、異教的等々の近代的な神話のもとに求められるべきではなく、むしろ真理に直面する恐怖に立ち竦んでいる啓蒙そのもののうちに求められねばならない<sup>1)</sup>。

『啓蒙の弁証法』

M. Horkheimer & T. W. Adorno

### 目次

- ・はじめに - 学生の実相を観る意味
- ・事例に観る啓蒙の病態
  - (01) 自我年齢と知能年齢の断絶
  - (02) 自己の権力性
  - (03) 文化産業の囚人
  - (04) 自己像の再構築と弔いの儀式
  - (05) 職業の模索
  - (06) 外界の植民地
  - (07) 想念世界と外界との癒着
  - (08) 疎外恐怖
  - (09) 自己像を脅かす事態との「不必要な」闘い
  - (10) 独特な順応適性
  - (11) 目的のない人生
  - (12) 自律性の欠如
- ・啓蒙の欺瞞性
  - 1. 啓蒙の転落
  - 2. 神話の解体と普遍道徳
- ・おわりに - 事実は Vector として把握されねばならない

### 註

### 参考文献

- ・はじめに - 学生の実相を観る意味

筆者はゼミ学生に、認知行動論的な手法で自己分析を行わせている。そのために「状況 - 感情」の時系列データ（あるエピソードを、感情の流れを中心に記述した文章）の提出を求めている。感情は自己保存の原理によって引き起こされるので、感情ないしはその変化から、

保存ないしは保全しようとする自己の姿が明瞭に浮かび上がる。この分析結果に基づいて、確かな幸福の条件と行動の課題を考察させるのが、ゼミ本来の方向である。しかしこうした作業の中から浮かび上がる今日の学生たちの苦悩は、教育・文化・社会への厳しい告発でもあって、御用済みとばかりに抽斗深く葬ってしまうことは、歴史的な罪悪として許されざることに思われる。

なぜなら、こうした作業によって、教育を含む諸々の啓蒙活動それ自体が、きわめて欺瞞的なものとして浮かび上がり、実に心苦しいものを感じるわけであるが、M. Horkheimer & T. W. Adorno が、『啓蒙の弁証法』で述べているように<sup>2)</sup>、その事実にとじろいで、そこから眼を逸らすところに、啓蒙が神話に退行していくまさにその原因があると考えられるからである。啓蒙自身が有する自己の権力性が、己の進歩性の芽をことごとく摘み取ってしまう前に、こうした分析作業の結果を、学生の証言に基づいて報告することは、作業した者の歴史的責務であると考えられる。

そこでこの小論では、最近数年来の結果の中から、下の 12 例を報告しつつ、学生の心的な形態と啓蒙との諸関連を考察することにした。制約されたデータであり、また分析であるというばかりではなく、プライバシーの問題もあるので、それぞれの事例では、特徴的側面だけを取り上げ、事例を数多く取り上げることで啓蒙批判の幅を確保しようとしている。各事例に付したタイトルは、当該学生の心的形態の特徴を簡単に表したものである。

- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| (01) 自我年齢と知能年齢の断絶  | (07) 想念世界と外界との癒着         |
| (02) 自己の権力性        | (08) 疎外恐怖                |
| (03) 文化産業の囚人       | (09) 自己像を脅かす事態との「不必要な」闘い |
| (04) 自己像の再構築と甲いの儀式 | (10) 独特な順応適性             |
| (05) 職業の模索         | (11) 目的のない人生             |
| (06) 外界の植民地        | (12) 自律性の欠如              |

なお、この小論は、欺瞞に転身した啓蒙の姿を描くために書かれたものであって、けっして学生を貶める目的で書かれたものではない。しかし彼らの心的形態を病態として述べねばならない時、筆者は学生に対して深い陳謝の念を禁じえなかった。己の心的形態が病んでいるかの如く言われるのは、たとえ啓蒙の被害者であるとしても、不快であるに違いないからである。筆者は、事例を述べる前に、当該学生に対して心からおわび申し上げる。

### ・事例に観る啓蒙の病態

#### (01) 自我年齢と知能年齢の断絶

この学生の記述によると、父親はいない。母親は、大手 \* \* 会社の営業所所長である。非常に几帳面な性格で恐ろしい程であるという。これまで、テストでよい点を取っても、塾でよい成績を持ち帰っても、誉めてくれたことはなかった。説教が必要な時だけ、口を開いた

が、祖父の暴言暴力に耐えながら育ったので、その叱りかたも半端ではなく、泣き叫ぶような喧嘩になった。また、雨の日に車で駅まで送ってもらうような時には、大方、「自分は、人をまとめるという、たいていの人が嫌うことをがんばっているが、おまえは何もがんばっていない。世間はもっともっとおまえが思っているより甘くない」というような説教になるので、少々の雨なら、自転車で行くことにしたという。この厳父のような母親を娘は、「どうしても、避けてしまう」らしい。それでも、成人式の振袖を用意してくれた時には「(一般に)子どもは嫌い。甘やかすことも、可愛がるのも嫌い。汚いし、見ているだけでも腹が立つ。しかし、子どもは欲しかった。自分の子どもだけはかわいい」というような「母親らしい」本音を吐露することがあって、そのときだけは少し気持ちが和らいだということだった。

親の子の愛し方はいろいろである。それはおそらく未熟なもので、自分勝手なこだわりで満ちている。子供は敏感にそれを感じている。子の愛され方は、マスローによれば<sup>3)</sup>、おそらく一定の要件が満たされねばならない。子供は、周囲に尊重され、生きていてよいのだという実感に満たされていなければならない。そうでなければ、自己実現ができない。子は親の背中を見て育つという。しかし、その真相は、親の生き方に呪縛されて育つということである。ひとは皆、未熟な親から生まれてくる。周囲の育児の経験が生かされないような社会では、マスローの基準は、けっして十分には満たされない。子供を育てるということに関心を持ってない社会に生み落とされた子供たちは、どうやって生きていったらよいのか戸惑うばかりである。自然の理に反した存在は、自然の理によって消滅するほかはない。しかし、それでも、力強く生きていって欲しいというのが、身勝手ながら、未熟な親の切実な叫びである。社会は厳しいものだから、もっとしっかり生きねばダメだと、親は子に言う。しかし、子供は、その生命のあり方によって、身をもって、親や社会に訴えている。そんな強迫的な環境では、自分は育つことができないのだと。しかし、そんな子供たちも、やがて親の苦悩を知って、少しずつ親を許して行く。その時、子供たちの心には、育ちきれない悲しみと、親への共感との矛盾した二重構造が残される。

「仕事を完璧にこなしているらしい母の存在は、子供の頃から自慢できることでもあり、反対に私の反発している所でもありました。進学の際、やっぱり私には母とは違った面で偉大になりたいという気持ちがあって、演劇・声優の専門学校に行くことになっていました。けれど、結局今私はここにいます。遊んで、バイトして、奔放な生活を送っています。強い意思がないのがいけないとは思いますが、母の仕事に最後には憧れています。矛盾していて自分でもよくわかりませんが。」

長い時の流れの中で、あの一方向の悲しみが薄れ、他方の共感が内面化されて行く時、結局、親と同じような生き方が、目指されることになる。しかし、それがまた悶着の種である。虐待された子は、自分の子を虐待するかもしれないし、目標が大きすぎて、強い負担感と挫折とを味わうかもしれないのである。

この学生の知能年齢は、種々のテストから判断すると相当に高いものと判断される。簿記

などを学ぶ力は十二分に持っているものと思われる。しかし、資格取得を志すということはなかった。母子・男友達等の人間関係の中で消耗して、そうした机上の努力を維持したり、簿記の新たな分野へ興味を拡大したりすることはなかった。しかし、そうした生活に反省するところもあって、パソコン検定を目指し勉強を始めたという。パソコンの能力も高いので、これは何とかやり遂げるものと思っているが、母親との関係が悪化して、また夜のバイトを始めているといったありさまで、達成が危ぶまれる。また、

「自分は、机上の学習より、やはり販売現場における駆け引きの緊張感や、人間関係が拡大して行く充実感に惹かれる。私は、客や業者に対する時に、気合とも言うべきものが自然に発揮されているのを感じる。この気合において、私はだれにも負けないと自負しており、販売実績も会社からしばしば評価してもらってきた。」

と言っているように、マネキンなどのバイトでも能力を発揮し、売り上げ向上で大いに評価もされてきたのに、結局は派遣という形態から脱することが出来ない。その折角の高い知能も、当人の存在を顕彰する形として実らない。それに対し、当人は次のように言って取り合わない。

「来年からはこんな風にいられるとは全く思っていません。遊んでもいられないし、みんなで馬鹿騒ぎをして笑っているということもできなくなります。だからこそこれからは、自分のやりたいことを見極めてがんばっていきたいのです。自分の性にあったやり方を吟味したいのです。他者から見て、またも不真面目な生活に見えるのだと思いますが、今度はただ遊びたいためではありません。今まで19年の人生を通して、ずっとやりたかったこと、私はこれのために働き、正社員では作ることのできない時間を使って、甘えを実行したいと思っています。もう変える気はありません。今しかできないことを、がんばっていきたいと思います。この辺が、自我年齢の低さでしょうか？」

この『甘えの実行』とは、内なる自然の原理（自分の性）に従いたいという叫びである。それなしには自己の存在が確認できないという思いである。愛と尊敬を受けなかった子供は、自己実現に至れないのだという。自我が成熟していかないからであろう。まさに、マスローの主張どおりの事例であろう。この学生の心底には、母親に甘えたいという気持ちが煮えたぎっているように想像されるのである。

「女が自立すること」がこの母親の信条である。しかし、その信条は家族を破滅させている。破滅した家族を収納する家が、この母親に重苦しいローン返済を迫っている。この母親の信条は、恐ろしい家父長的父親からの絶望的な解放欲求として獲得されたものであることが想像される。そしてまた、娘も同様の信条を抱いている。それは一方で、植民地化された魂の結果として、また一方で、植民地支配者からの解放欲求として抱かれたものである。

しかし親の権力からの解放欲求が、こうした女の自立欲求に短絡されるところに、現代産業社会の特色がある。家族を省みない孤立した自己ほど、企業組織はその存在を独占しやす

いのであり、生産効率を上げることができる。産業社会の支配者は、孤立を自立と言い換え、生産物の入手をその孤立の代償としたのである。生産物の入手をそそのかすことこそ、利潤追求には不可欠のことである。「女の自立」といった、それ自身は真実であることも、産業社会の支配者には結局、道具でしかなかったのである。

現代社会の中で啓蒙された女性たちほど、女性の自立という真実に傾倒しやすく、遂には、産業社会の支配者の歯牙にかかるのである。啓蒙そのものが支配の手段であるということに、真に賢明な人間は、当の昔に気づいていたはずなのだが。

## (02) 自己の権力性

この学生は、一種の虚構の中に住み込んでいる。その虚構の露見を権力的姿勢によってカムフラージュしている。その権力性は産業社会の支配層には受け入れ難いものである。むしろ本人もそれを感じ取っており、就職活動では、非常に強い緊張にさらされている。

その虚構性の証拠は、本人が自己分析用に記述した3つのエピソードのいずれにも明らかである、

飢餓に瀕したアフリカの子供たちの現状を TV 報道で知ったときに、それに引き換えて自分の幸せを感じたと記している。

しかし、悲惨な現実を目撃した時に感じることは、むしろ己の不公平な幸せに対する痛みであろう。その指摘に対して、その通りだった。しかし、そのように考えることで、何もかもが崩壊してしまいそうな気がしたと述懐している。自分が目下気にかかっている就職も、精々、そうした不公平な幸せを目的にしたものにすぎないのだと。

会社訪問の電話連絡、履歴書の清書といった行為にさえ、非常に緊張し、事態の内容的把握に支障をきたすほどだった。自分は、いったん不安になると、ものごとのすべてが不安になる。このようなことで仕事をやっていけるだろうか。こうした不安は一生涯ついてくるもののように感じられると。

こうした極度の不安・緊張の背後にあるのは、明らかに内と外との断絶、すなわち本人が感じている自己の虚構性である。

誕生日に、母親がケーキを用意してくれた。ケーキだけだと思ったら、思いがけなくお祝い金がもらえたので、よこび勇んで、欲しくて、欲しくて堪らなかった洋服を買ったというのだ。

格段のこともないように思える。しかし、ケーキに見られるように、そこに母親の気持ちを汲み取れなかったら、ただのケーキであり、けっしてバースデーケーキではないということなのだ。物本来が有するものは機能であって、価値ではない。価値とは人が付与したもので、あるいは人の想いの投影したものだ。欲しくて、欲しくて堪らない洋服も、手に入れてしまえば、その機能しか残らない。しかしそのような機能は、すでに自分の周囲には掃いて捨てるほど満ち満ちている。しかしあのアフリカの子供たちには、その機能こそ価値なのだ。よ

るこび勇んで買い物に出かけたとき、アフリカの子供たちのことは、まったく念頭になかったという。こうした不公平な幸せに対して、若者を盲目にしているもの、それはファッション雑誌のモデルに刺戟された自己像の実現欲求である。物の持つ空しさを知りながら、文化産業のそそのかしに容易に乗せられて、消費生活を強迫されている現代の人間たちの姿がここにある。すっかりそこに絡めとられていながら、それをカムフラージュする権力的意志、それが強ければ強いほど、それだけその自己は虚構的であると言わねばならない。

産業社会によって完全に支配されつつ、その結果である不公平な幸福へ固執し、さらにその矛盾を感じながら暮らしているのは、ひとりこの学生に限ったことではない。しかし、こうした矛盾を強い権力性によって抑えこもうとしているところに、特有の苦しみを抱え込んだこの学生の特質がある。当人は、就職活動中は、この権力性すら抑制せねばならないと考えているが、それはまさに産業社会のもたらすこの矛盾を意識化することになる。産業社会への疑惑を抱えながら、そこへの途に歩みだすことが強迫されているのである。

### (03) 文化産業の囚人

この学生は、もし、漫画に浸りきってこの歳まで暮らしてきたら、きっとこうした文章を書くようになるだろうと思われるような文章を書いている。架空の第三者に対して、何らかの力加チュアを提供して悦に入っているという書き方なのだ。例えば、次のような調子である。

「衆目の一致するところ、\*\*\*\*（自分の本名）は就職には向いていない。」

「なぜバイトを始めようと思ったかという、お金が無かったから。実際のところ皆そんな理由だろう。僕もそんななかの一人だったということだ。」

「僕が電話したバイト先は、日本人なら誰でも知っている有名なところだ。創業80周年を迎えたスーパー・\*\*\*\*でした。…結果は一週間後でした、一週間後電話がかかってくる見事採用されました。」

むしろそこに想定されている第三者とは、もうひとりの自分である。この学生は、こうしていつまでも自分の世界に閉じこもっていることができる。いや、ずっと閉じこもってきたのがこの人間なのだ。したがって、現実には、この閉じこもった想念の中で、理念化され、ほとんど実体を欠いた記号的・戯画的なイデーに変質している。しかもその変質には大衆報道や漫画の、皮相的・観念的・通俗的な特性がそのまま反映している。

戯画的メディアの中で育った想念世界の唯一の通信チャンネルが、とりもなおさず戯画的メディアそのものであるということはまったく怪しむに足りない。それは彼自身もそうしたメディアのキャラクタとして行為することなのだ。「うまく人と付き合っていくには、自分のキャラを替えながら行けば、だれも傷つかず、幸せな日々を送れるのだ」と。これは当人の、バイト経験の述懐である。こうした自己同一性を喪失したかに見える自己像そのもの

が、如何にもこうした種族の戯画的把握の産物なのだが、問題は、こうした把握の結果、彼自身が、ますますその自己と幸福の把握に失敗していくということなのだ。戯画的把握とは、彼の想念世界で性急に「真実以上の真実」を求めた結果産出された虚偽であって、事実を丹念に叙述することの中に真実を浮かび上げさせようとするものではまったくないのである。

しかし、事実の把握の仕方を丹念に教えるような教育がもし存在したとすれば、それは支配体制にとっては、許し難いものであったかもしれない。支配体制が啓蒙を推進してきたのは、それによって、民衆が、神の代わりに支配者を頼り、産業の担い手となる限りでのことであった。しかし、この事例のような、まさに文化産業の囚人ともいうべき、自立困難な学生を見るにつけ、この産業社会の非道さには、眼を蔽いたくなるものがある。

#### (04) 自己像の再構築と弔いの儀式

この学生は、失敗した就職の二次試験の経過を記述しているが、その経過の中に、特筆されるべき特徴があった。それは、自己の存在感を保全するための意識操作の技術を持っているということであった。その技術は、問題自体を解決する上では必ずしも効果的なものではないが、不安に苛まれている時間を最少に限定する上では、大いに有効な方法であった。

特に、試験に落ちてから、再度自己を取り戻す過程が、まさに弔いの儀式であった。試験を受ける者は、必ず「合格した自己」という可想的自己像を抱き、現自己をそれで支えている。したがって、発表までの間、不合格を覚悟しなければならない場合でも、どこかで合格を期待しているのが常である。そうした可想的自己への依存関係の中で、不合格を突きつけられる時、多くの学生は、その可想的自己を葬ることが、現自己をも葬りかねない事態に直面して、困惑することになる。

しかし、この学生は、次のように書いている。

「でも今思うと、最後の面接も今まで受けてきた試験も自分にとって無駄ではなかったと思っています。まわりの子がどうがんばっているか見られたし、自分がどれだけ甘かったかもわかりました。最終まで進めたということは、自分はそのままで認めてもらえたと思って、これからもやっていきたいと思っています。」

要するに、こうした危機から自己を保全するために、この依存関係から脱却して現自己を自立させるという手続きを踏んだのである。現自己の存在感を取り戻し、独り立ちさせることで、それまで自己の支えであった可想的自己像を安全に葬ることができたのである。

不合格になった学生たちの多くは、なかなか次の行動を起こせない。その最大の理由は、可想的自己像を葬りかねているということがある。稀薄になりがちな自己の存在感は、常時、何らかの支えを必要としているからである。この学生のように、その行動すべき過程をしっかりと踏襲して、自己に自信を持てるようになることが最も大切なことである。しかし、それができない学生には、新たな可想的自己像の構築のために何らかの支援をすることが必要に

なる。

少子化社会の中で、底引き漁船並みに、学生を掻き集めながら、現産業社会への適応という旗印をいつまでも絶望的に掲げている昨今の大学では、こうした支援は明らかに手詰まりになってきている。学生の進むべき道はもっと多様でなければならない。農林水産・諸々の職人業、環境 NPO 活動といったものへ、かつて啓蒙が切り捨てた領域に、再度若者の意識を開いて行くことが求められている。

#### (05) 職業の模索

この学生は、これまでのバイト経験を自己分析用データとしてまとめている。その経験は次のように要約することができた（このような要約を作り出すことを、ゼミの第一目標としている。）

自分は、常々、自分の存在感を追い求めてきた。

存在感は、自己のイメージと現実の自分との距離によって、希薄になったり強くなったりにしているように見える。

経験によれば、安楽な自己イメージを追求しても、たいてい実現できず、かえって存在感を失うことが多かった。そしてその時は不幸に感じられた。

安楽な自己イメージは、実現されても、達成感がないので、存在感を感じられなかった。存在感は、他者との関係の中に、自分の居場所を見出したときにも強く感じられた。その時は、その関係の確かさ・強さが、存在感の強さになっていた。またその時は、幸福に感じられた。

したがって、他者との関係の中で、相互的に支え合う関係にある自己というイメージが追求できれば、より確かな・より強い存在感が得られる可能性がある。おそらくこれが幸福への道であろう。

この学生は、こうした経験に基づいて、あらためて職業を模索する決意をしている。世界の疎外を修復する活動の中で、自分の適性に合った活動を選び取れば、それはおそらくの自己イメージに近いものとなるであろう。職業の選択において、よく言われているように、本当にやりたいことを見出さねばならないのであろうか。多くの学生は、すでにそこで躓いているのだ。世界には救済されねばならない存在に満ちている。歴史的に今為されねばならぬことはいくらかもある。そうした中から自分にできそうな役割を選び取ればよいだけではないのか。

ところで、それにはまず、世界の実態が学生たちに認識されねばならない。しかし、そういうことが可能になるような教育が為されているであろうか。そして、もしそれが為されたならば、産業社会の矛盾を白日の下に曝す結果になるわけだが、この産業社会の走狗たる大学教育に、それが期待できるであろうか。

## (06) 外界の植民地

この学生は大病院の医療事務を目指して入学してきた。しかし大病院ほど派遣の事務員でまかなわれていることを知って、次は、人に羨まれそうな大企業を目指そうと思った。説明会でも、そうした気持ちが競争心を掻き立てた。エントリーシートの自己PRを書くにも、当初、自分を会社の理想像に合わせようと必死だった。それを友達に指摘されて、肩の力が抜け、少し安心した気がしたと書いている。しかし試験は運頼みだった。不合格だった。また別の会社を受け、3次試験まで行ったが、内定を意識しすぎて緊張し、面接をクリアできなかった。自信を失い、夏休み中は活動できなかった。しかし周囲では内定者が誕生している。このままでは駄目だと、まだ十分立ち直れないまま、次の活動を開始しようとしている。

この学生の特徴は、外的な価値基準が内面化しやすいところにある。この学生の意識には、絶えず「外聞」ということがある。自己同一性の稀薄さということが、苦しみの根底にあるに違いない。まさに学校教育や文化産業が造り出した被害者である。家庭も世の風潮に無批判的に順応しているのかもしれない。順応しようとするその社会が強迫的に固定化されるとすれば、その社会は当人の生命環境としてはまったく硬直化している。順応の真相は、競争を避け多様化するところにある。そして多様化の本質は、模倣困難な形質を獲得するところにあるのだ。しかし教育はそのために何をしているのかと問われねばならない。それどころか、商業主義の文化産業に墮した大学とは、通俗演歌を売るレコード会社と変わるところはない。大学自体が、学生の思考を奪い、社会を固定化して見せしめている。

## (07) 想念世界と外界との癒着

マナへの怖れを、祈ることで和らげようとするところに、支配と啓蒙とが起こった。啓蒙は、神話から人心を解放し、自然を原理に解体し、演算可能な対象にしようとしてきた。しかし、原理に解体された自然は、瞬く間に、支配者の欲望のままに、資源化され、破壊され、コクーン化された人間の居住環境は、たちまち崩壊の危機に立ち至った。にわかに科学技術への批判が高まり、理科離れが進行し、汎神論的な自然観が唱導されるようなアニメ作品や映画やTVドラマが、文化産業の注目するところとなった。産業社会の支配こそが、科学技術を道具化した元凶であるのに、彼らは「不公平な幸福」を楯に、民衆の眼を欺いて、批判を逸らしたのである。

もっとも、支配は、科学技術批判が高じるのも放置できなかった。その道具としての有効性を手放すわけにはいかないことに気づいたからである。民衆の眼を再び科学技術へひきつけるために、何らかの権力がノーベル賞の密かな誘導を図ったのではないかと疑ってみても、だれも怪しむものではない。

今の学生たちは、まさに理科離れの世代である。もっとも、日本の民衆は、潜在的には常に理科離れの状態にあった。むしろ汎神論的な傾向が心底に息衝いているのであって、祈ること・念じることが、外的な力の媒介になることを、信じるように奨励されてきたのである。

むろんそれは体制の護持と無縁ではなかった。汎神論的な証拠などは、民衆の日常生活の中  
にいくらでも挙げることができそうに思うが、学生の記述になるものはむしろまれである。  
この学生は、次のように書いている。

「…すぐに履歴書を書き出しました。慎重に丁寧に前から順番に書いていきました。ずっと書いて  
いると、だんだん手が麻痺し、集中力もなくなって、字も汚くなっていきました。これではダメだ  
なと思い、気を引き締めてゆっくりと書いていきました。取りあえず、資格の欄まで書きちょっと休憩。  
志望動機と自己PRはどういう風にかこうか。なかなか思い付かなかったの、何かいいヒントはな  
いかと思いインターネットで調べてみました。こういう時にインターネットはすごく役に立つと思  
いました。いいヒントを見つけ出して、それを工夫して、自己PR・志望動機もなんとか書き終えて、  
最後に写真を貼り、印鑑を押す！なぜか今までも印鑑を押す時には気持ちが入ってしまう。いつも受  
かりますように…と気持ちを入れて押します。送付文を書き添えて、すぐに郵便局に行き速達で送  
りました。」

いつも受かりますようにと念じながら印鑑を押すのである。「インターネットなどという技術  
を使うこと」と「念じることが実現されるようにという願望」とが、違和感なく共存してい  
るのである。インターネット検索は、まさに念じることが実現されるように願って行われる  
ところの神話的行為なのだ。

確かに、技術は、古代から神話的・奇跡的であることによって評価されてきた。神に代わ  
って民衆を支配するためには、支配者は、神話を実現するような技術を、絶えず民衆の前に  
提示することが求められてきたのである。その結果、啓蒙は、神の創造物たる自然の原理を  
紐解いて、およそ神ならば選び取らなかったような人間中心の不自然な条件のもとで、その  
原理を発現させ、得体の知れない不調和な創造物を生み出すことになったのである。啓蒙は、  
自然のマナ性を嘲って、それは人間の恐怖の投影にすぎないと主張してきた。しかし、結局  
のところ、啓蒙という行為自体が、支配者の欲望の投影にすぎなかったということなのだ。

#### (08) 疎外恐怖

この学生は、不仲な両親のもとで、絶えずその存在を脅かされて育った。さらにそれに追  
い討ちをかけるように、中学ではイジメに遭い、9ヶ月間無視されつづけた。耐え難くなり、  
引きこもった、いく度も自殺を考えたりした。こうした不幸な経験の後遺症として、いまで  
も疎外感を抱きやすく、緊密な人間関係を作ることを避けている。ゼミの仲間に加わるこ  
とはしない。

高校の卒業旅行で、気が進まなかったが、5人でオーストラリアへ1週間出かけた時のこ  
とだった。案の定、疎外感を味わって、次のように述懐している。

「たぶん長い時間ズーッと同じ場を共有していて、精神的につかれていたのだと思う。いくら仲が良  
くても、案の定こうなるのだ。奇数だったし。私はある程度の距離を保った関係がいい。」

「そのメンバーとは、今も仲良く遊んではいいる。全員が揃うことはないけれど、たまにメールでやりとりしたり、ごはんを食べに行ったり。その『たまに』がポイントかな。これからもずっと大切にしたい仲間です。」

疎外されるのは恐怖だ、しかしそれを恐れて、必死で関係を維持しようとする、疲れきってしまうのである。

この学生にとっての転機は、高校の時に訪れた。不幸な中学時代のために成績も落ち、「家族は絶望し」、「レベルも曖昧な私立高校へ入れられた」、「無意味な規則の窮屈さに、なぜこんな高校に入れたのかと母を責め立てることが度々あった」、「予想を遥かに超えた退屈な高校生活で、わたしは思った。何のために、だれのために、何故わたしは無理をしているのか？これからは自分のやりたいようにやろう、と」。孤独に耐え抜いてきた強さが、遂に芽を吹いたのだった。それから、サブカルチャ音楽にのめりこんだ。

短大に入ってから、小物のお店を持ちたいという夢を抱くようになって、両親の不仲の原因にもなったと想像される父親の事業の失敗などにも、それなりの理解ができるようになったこと、両親が離婚を思いとどまってきてくれたこと、母親が、サブカルチャ音楽の知識を認めてくれたこと、また、お店を出す資金を援助してもらえる目処が立ったこと、さらに、二人姉妹の姉とは、次第に打ち解けて語り合えるようになって、OLの姉もまた自分の夢と同じ夢を抱くようになったこと等々、好条件が重なって、いまでは時折笑顔ものぞくようになってきている。

話をしていると、孤独の中で蓄積されてきた特異な個性が、小物を通して、共感者を求めているということが感じられる。それが商売として成立するか否かは疑問であるが、彼女の想念の中では、少なくとも仲間とともに喜びを共有したがつているのである。何とか、その夢が実現するように願っている。そうした趣味の店は、各所にできつつあって、インターネット上にもHPがある。しばらく、そうしたお店で、勉強させてもらうように勧めている。

この学生は、(事業の失敗で)、「母親に辛く当たる父親が怖かったし大嫌いだ。小さな頃から離婚という危機と隣り合わせだった」と言っているが、ここに、彼女の不幸が始まったようである。話によると、父親は、いろいろな事業に手を出しては失敗してきたらしい。しかし、自分の店を持ちたがつているこの娘は、きっとこの「大嫌いな」父親の性格を継いでいるに違いない。自分の想いだけで商売が成功するはずはない。不幸が世代を越えて再生産されるような事態だけは、避けたいものである。

ところで、人間の生き方として、やりたいことをやるのが一番であるといった考え方が一般である。しかし、それがどのような意味で確かなことであろうか。やりたいことの中には自分の適性が幾分かは反映しているであろうから、仕事の達成度によっては、そこに自己実現の充実感があるであろう。しかしそれは精々自分だけの想いが実現されたにすぎない。疎外の救済といった歴史的な意味や、他者からの感謝が得られるわけではないのだ。その意味で、確かな幸福へ向かっていくといった戦略性を欠いている。また、この学生のようなやり

たいことを見出すことのできた若者は、限られているという現実を考えると、こうした考えは、あまり機能しないことは明らかであろう。

こうした考え方が一般になった原因は、やりたいことができない現実があるからであろう。分業化された効率最優先の生産体制の中では、やりたいことが具体的に思い描けなくても、何か自由に羽ばたきたいという想いは、だれもが抱くものであろうし、子供に託したくなるであろう。しかし、そうした体制を温存したまま、あるいはそうした体制に入って行くことをそそのかしながら、そうした夢を託すのは、いかにも無責任・無気力な生き方と言わざるを得ない。しかし、そうした生き方に民衆を誘うのが、支配と結託した啓蒙の果たした役割だったのである。それは肉を欲する野生を飼い馴らして、家畜化するのにも似ているのである。

#### (09) 自己像を脅かす事態との「不必要な」闘い

この学生は、会社訪問から内定をもらい承諾書を出すまでを書いている。ここでは、迷う気持ちを整理できたときの安堵感についてだけ取り上げてみる。

「…会社訪問兼説明会に参加しました。話を聞くと、\*\*\*での販売はすごく大変だし、希望勤務地につけるとはかぎらないし、休みのことも考えるとすごく不規則で条件があまりよくない感じでした。しかし、人事担当の方が言うには、本社で事務を一名募集していて、もしあなたに内定が決まった時には本社の事務になりますと言われました。しかし、本社は家から1時間40分ほどかかるので、すごく悩みました。朝はもちろん早いし、だからと言って、向こうに独り暮らしをすることはできないからです。でも、通えない距離ではないのです。また、退社時間が遅いと女性の場合は、両親も心配するかもしれないが、事務職なら退社時間は早いし、その点は好都合であるとも言われました。」

会社訪問時に、内定すれば事務職で採用されることが伝えられた。しかし本社まで通うのはかなり大変なので、大いに悩んだと一応書いている。しかし、実はこのとき既に心は決まっていたものと思われる。営業でもいいと思って訪問した会社で、事務職で採用されるならば、それは願ってもないことで、何より魅力的であったはずである。通勤時間がかかるのは確かに問題ではあるが、悩みを打ち消すように、『でも、通えない距離ではないのです』と言っているのが、その証拠である。したがって、内定すれば、承諾するはずである。しかし、当人にとって、ことの顛末は決して明らかなものではなかったらしい。

さて、面接などでは、自己PRをしっかりとやろうと思っていたところ、あまりそうした機会も与えられないまま、バタバタと終わってしまい、こんな手応えのないことでは駄目だろうと思っていたところ、翌日には内定通知が送られてきた。

「その日は何度も内定通知を見ました。その通知と一緒に、入社承諾書が入っていました。それは10日後に返送しなくてはならず、また親と考えました。自分がこれから何年も続ける仕事だからです。」

だからこそ、簡単に決められないという気持ちが出てくるのです。返送する10日の間、親友や親、就職課の先生に相談しました。最終的に決めるのは、もちろん私ですが、内定をもらって、舞い上がって、早く楽になりたい一心で決めてしまうのは嫌でした。だからこそ、悩みました。本当にその仕事をしたいのかと何度も自分に問いかけました。返送する二日前に決断しました。そして、入社承諾書に記入しました。その時心から安心しました。」

悩み、そして本当にその仕事をしたいのかと自問自答したと。しかし、その答えは既に決まっています、問題はむしろ、その通勤時間をいかに覚悟するかということだったはずである。ところで、この学生は、以前、次のようにも書いていたのである。

「私は、中学の時から今もずっとバレーをしていて、私はバレーを通して強く、大きく成長しました。高校の時はとても練習が厳しく、肉体的にも精神的にも追いつめられましたが、あの厳しい練習を乗り越えたことで、広い範囲まで物事を考えられるようになりました。一見おとなしそうに見られがちですが、一度決めたことは最後までやりとげたいと思う意志が強いです。私は『不言実行』というよりも、自分の考え行動をはっきりと言葉にし、実行していく『有言実行』をモットーにしています。」

むしろ、このモットーを実行していく覚悟ができたのであり、承諾書を書くことができたのである。こうして通勤問題によって、心から手に入れたいと願っていた事務職を棒に振ることにならないで、本当に安堵したということである。もしバレーなどによって心身の鍛練ができていなかったら、『でも、通えない距離ではないのです』とは言えなかったかもしれない。

それが若いということなのかもしれないが、多くの学生が、自分の気持ちに気づかずにいるということがある。こうして自分の気持ちを書かせてみても、なおかつ気づかないことがあるのだから、普段から自分の心の動きなどを反省することもないのであろう。しかしそれは人間理解の大きな障害になる。啓蒙は外界に対する蒙ばかりを攻め続けてきたが、内に対する蒙には無頓着だった。内なる蒙は、宗教や道徳の課題であって、その蒙を啓くことは、精々個人的な救済にしか役立たないし、そのようなものは産業社会の支配にとっては、理解するより、強制力を以って統制すべきものと信じられてきたからである。しかしそろそろ、権力の時代の終焉を宣言し、存在性を立ち上げることを以って万民の道徳とすべき時代を迎えねばならない。

#### (10) 独特な順応適性

この学生は、従順で、理解力も判断力もある、いわゆる「中庸に」啓蒙された女子学生である。ある銀行を受け、筆記試験も論文も、そして面接も、本人は十分にこなしたとは思っていないようであるが、とにかく内定をもらってきた。面接をしていても、文章を書かせても、状況に応じて、適切に自分の位置を判断して、分を弁えようとする姿勢があり、それが、いまいまくも、こちらの厳しい批判を自主規制させる効果がある。本人の書いたものから例を引いてみよう。

「私は今バイトをしていないので、親の仕送りからいろいろやりくりをしているのですが、自分の好きな物を買える分も、少しですがあります。そんなにたくさんは買えないので、私はじっくり雑誌を見て欲しい物を探します。そしてそれがいくらかを検証して、それから買い物に行って購入します。なかには、買い物に行って、その場で欲しい物を探して買う人もいると思うけれど、私は買い物に行く前に欲しい物を決めてから買い物に行くタイプです。どうしても欲しい物が高くて買えないという場合・・・、それと同じような物で値段が安いものを買おうとはしません。少しずつお金をためて目当てのものが買えるまで、食費をけずったりするので、欲しい物があれば他のことで我慢するタイプです。ですから、私は物事に対して計画性があると思います。」

次の引用からは、こうした傾向がたんに性分によって行われているのではなく、状況を判断しながら学習されていることが読み取れる。

「一人暮らしを始めて、一番思ったことは親ってすごい！ということです。生活していくのにこんなにお金がかかるとは思いませんでした。電気代・ガス代・水道代の生活費は仕送りの中でやり繰りしますが、生活費を浮かせて余ったお金は私のお小遣いになります。なんとかお金を浮かすために、私は様々な節約をしています。夏場は多少暑くてもクーラーをつけずに窓を全開にしてみたり、冬はちょっと寒くても蒲団にまるまって寒さに耐えたりしています。使わない電気はコンセントを毎回ぬいたりしているし、水の出っぱなしには注意したり、ガスを使わない時は元栓をひねったりしています。お風呂に入るときもお湯を出すとガス代が高くなるので出っぱなしには注意しています。また家を出るときには、その都度ブレーカーを落とすことにしています。食事もお食事は極力減らして、家にあるものを食べるようにもなりました。スーパーも、新聞広告を見ることができないので、情報をつかみにくいけれど、今となっては何曜日が安いとか分かるようになってきて、安い日に買い物をするように心がけたりなど、節約できることはがんばって節約しています。そのせいか、一人暮らしを始めたころより生活費が安くなってきました。親と一緒に暮らしている時は、そんな節約のことなんて全然考えもしなかったし、気を付けていませんでした。」

私は今こんな生活を送っていて、周りの人が聞いたら、『けちな生活しているな』って思われるかもしれないけれど、私は全然苦だとは思っていないし、むしろ楽しんでやっているくらいです。反対に私は今すごく貴重な体験をさせてもらっていると思います。お金の価値観がぐんと変わったし貴重さを実感することができました。

やっぱり今の生活より親元で暮らしていたときの方が、気持ち的には裕福だったと思います。好きなものも簡単に手に入っていたし、なくなったら、もらえばいいと思っていたので、先のことなど考えずに使っていました。でも今は1000円だって大金に思います。1000円があれば2食、場合によっては3食、食べられます。昔、何気に使っていたお金も、すごく大切なものだったのだと実感できたのも、一人暮らしをしたからだし、その利点でもあります。でも欠点もあります。それはやはり孤独ということです。家に帰ってきてもだれもいないし話し相手もいません。しかし、それでまた、家族って本当に大切なものだってわかりました。たまに時間ができると父や母が名古屋に来てくれます。

当たり前のことのようで当たり前じゃない、この嬉しさがわかりました。」

次の2つの引用からは、この学生がなぜ内定をもらうことができたのかが窺える。

「集団面接が私の場合、5対1の個人面接になりました。就職試験の面接は始めてだったので、すごく緊張して、顔がひきつっているのが自分でもわかりました。でも笑顔だけはたやさないでおこうと思っていたので、笑顔でいるように心がけました。すごく緊張していたので、何を聞かれて、それに対して何を答えたのか覚えていません。」

緊張の中でできること、しかも最も効果的なことを判断しているということであろうか。本人は、運良く受かったと思っているわけだが、実にしたたかでもある。しかしこの銀行も負けてはいない、本人に次のように述懐させている。

「働き始めて辛くて辞めたいと思った時、辞めても今すぐ仕事が見つからないということを中心にひめて、4月から私を採ってくれた会社に、少しでも役に立てるように、がんばっていきたくと思っています。」

おそらく、こうした「従順さ」は、銀行の最も好むところであろう。

啓蒙の支配に果たす最大の目的は、民衆を制御のし易いものに変容することである。それには、彼らに、支配体制における諸関係を把握する訓練をすること、そうした諸関係の中で自律的に適切な行動ができるような訓練をすることである。まさに犬の訓練と変わらない。これらはまさに学校が教育という名のもとに、諸権力の顔色を窺いながら実践してきたころのものであった。しかし、こうした訓練は、真に存在性を立ち上げるためのものでもなければ、個にとって真に十分な自律性を発揮させるためのものでもなかった。しかし、幸か不幸か、日本の教育は、概ね啓蒙のためにさえ機能しなくなっている。筆者の周囲に集まってくる学生などは、文化産業の直接的な薫陶を生々しく受けた実に痛まじげな相貌を呈している。こうした学生たちに比べると、ここに例示した学生などは、まさに啓蒙されており、したがって、数少ない内定組であるが、そうした組に属するか否かは、ほとんどその「家庭」の文化、「生き残るための知恵」によって決定されていると考えられるのである。

#### (11) 目的のない人生

この男子学生の実家は、祖父母と母が、歴史的な宿場で細々とある家業を営んでいる。母親は彼に卒業したら手伝ってくれるように言っているらしいが、地元は過疎地であるということもあって、帰りがたらない。しかし、こちらでの就職にも身が入らない状態で、善からぬバイトに手を出して、享樂的な生活に陥ってしまった。こうした生活も親もとに帰りたくない大きな理由らしい。しかし、やはりこれではダメだと思い悩んでいる。悩みながらも、どうしても楽で楽しいその生活に舞い戻ってしまう。当人はともかく普通の生活をする心を心がけて暮らすようにしていると報告をしているが、完全に抜け出すことはできない。

「僕は今就職しようかしないか、考えています。今から就職活動なんて遅いということは分かっています。でもなかなか行動に移せません。とりあえずなにかしてみようと思い、就職の雑誌とかを買って見たりしました。だけど見ただけで何もしていません。雑誌を買った時は、やろうと思っているのですが、ちょっと経つと、なぜか止めてしまいます。その時自分は将来地元に戻るのに就職してもしようがないとってしまいます。面倒臭くなってしまい、何もしようとも思わなくなってしまいます。

それでもどこかで、これでいいのかと思ったりして考えたりもします。しかし考えていると暗くなるので、いつも考え込んでくると、友達とどこかに遊びに行ってしまう。考えなくなるまで毎日でも遊んじゃいます。そうすると自分は何をやっているのだろうって空しくなります。あとお金もなくなり、今は使わないと決めてためていた貯金まで使って、遊んでいます。また貯めればいやって思い、使ってしまう。自分はいつもそうです、自分にすぐに負けてしまいます。ダイエットしている時も、運動するからお菓子食べちゃおうとか思って、食べちゃったりします。運動も明日するから今日は休もうとか、いつもこんな感じです。いけないと思っていることもやってしまう。

今バイトはしていません、とりあえず、探してはいます。しかしあと一歩が踏み出せないのです。めんど臭くなってしまいます。今自分のことを気に入ってくれている人がいて、御飯を食べさせてもらったり、たまにお小遣いをもらったりしています。そんなことがあるから、別にバイトはまだしなくてもいいやって、思ったりもします。こんなんじゃダメだって本気でおもいます。でも本当に自分自身に甘いのです。今の自分は本当にダメな人間です。本当に生きている価値がないくらい。親にも申し訳ないです。分かっているのに止めないのは、すごく楽しいからでもあるけど、楽だということもありました。こんなことをいつまでも続けていたら、自分は本当に救いようのないダメ人間になってしまいます。いや、なっているのかもしれない。

しかし、今のままじゃいけないと少しずつ治して行こうと思い、今はやると決めたら後回しにしないで、すぐにやることを心掛けています。あと夜は寝るようにしています。今の自分は当たり前のことができていません。だから少しずつでも治そうと思っています。しかし、やっぱり自分に甘いところがでてきてしまい、できなくなることがあります。でも本当に少しだけれどできるようになったこともあります。お皿を使ったらすぐに洗う。洗濯物をためない、部屋の掃除、あと夜は寝ること。そんなこと当たり前だと思うかもしれませんが。だけど自分にはできていなかったことです。少しずつでもちゃんとしていけば、ちゃんとした生き方ができると思っています。ちゃんとした生き方がどういうものか解らないけど、少なくとも今みたいな生活ではなくなると思います。」

この学生の最大の問題は、その意志の薄弱さにある。命を燃やすような目標が見出せないので、享乐的な生活から脚を洗う動機付けができない。当人は、目下、「ちゃんとした生き方」を心がけてはいるが、実は、「ちゃんとした生き方」とはどのようなものか分からない。当人は、皿洗い、洗濯、部屋の掃除、夜は寝ること、等々まるで主婦のような規準ばかりを設けている。8歳ぐらいの時に、母親は父親と離婚しており、男として生きていくための規範を失っ

たということも大きく影響しているのかもしれない。

こうした不幸な子どもを救済するために、教育はこれまで何をやってきたかということがやはり問題であろう。「お前は どうして意志薄弱なのか . そんなことでは駄目ではないか」と、叱るだけだった。「駄目なのは分かっている . それではどうすればよいのか」 . これが個にとつての問題である . 個々の科目の、学習の動機付けということは、教育効果を上げる問題として、しばしば耳にするが、堅固な意思決定を行うための訓練といった問題が、教育スケジュールに上ったということは、聞いたことがない . まさにこうした問題は、個の責任の範疇に押し込められてきた問題であった . ここに、啓蒙のあの支配の道具としての性格が、あらためてまた明らかになるのである .

## (12) 自律性の欠如

この学生は、会話・スポーツ・旅行を楽しむ仲の良い家庭の子である . 見るからに屈託のない様子をしている . 医療事務のコースで勉強してきたが、医療事務から一般事務へ方向を切り替えている . 屈託があるとすれば、このことである . 就職には苦労している .

屈託のないその性格は、親や友人との協同関係の中に棲み込んでいるからであろうが、それはまた、当人の自律性を妨げているように見える . 当人は、次のように言っている .

「私は、いつもなにか検定があったり、試験があったりすると、目標を自分なりに立てて実行していますが、その通りにすまなく、いつもあきらめてしまうことが多いです .」

「目標をたてることは、なかなか難しいことだなあと私は思います . 私は本当にやりたいこと、ぜったいここに就職したいというところは今ははっきり言ってありません . ただなんとなく医療事務の仕事につきたいと思っているのです . この学校にきたのも、医療の勉強がしたいと思ってきたはずですが、なぜ私は医療を学びたいと思ったのか理由は分からないのです .」

曖昧な方向に歩き出したつげは、その都度、その協同体がかぶることになる .

「私は、就職課の先生に医療事務の仕事で家から近い所に就職したいのですが、どこかいいところありませんか?と聞いたら、医療事務はやめときなさい . 給料は安いし、就職する所がないよと言われ、ちょっと落ち込みました . いまさらいきたいとこないし、この学校で医療の勉強をしているので就職したかったのですが、その時、私は医療事務の検定を受けようと勉強もしていて、この検定のことも言ったら、先生は医療事務の検定を受けるなら、違う検定を受けたほうがいいよと言われて、またがっかりしました .

先生もいじめて言っているのではなく、これも今の現実を私にちゃんと話してくれているのだと思ったけれど、私はその日の夜、このことを両親に話しました . 父は、先生の言っている通り現実はそのような甘くないし、医療事務に就職することは難しいかもしれないけれど、検定の勉強をしているのなら受けてもいいと思うよと言ってくれました . 父はいつも冷静で、なにか私が本当に悩んでいることを相談するときちゃんと答えてくれます . 父にかわって私の母は言い方もきつく、性格もおおざっぱで、

隣で聞いていた母は、じゃあなんで医療事務の就職が無理と分かっている、この学校は、そうしたコースをいれたのだろう？と怒っていました。

私は弟がいるのでいちおうどう思うって聞いてみたのですが、弟は母に性格が似ているので、そんな学校に行くほうが悪いのだよと、きつい言葉がもどってきました。」

「私は、この学校にきて後悔してないし、新しい友達、地方の子もたくさんいて、話しをしていて毎日がとても楽しいです。」

あるいは、就職活動の中では、次のようにも言っている。

「この\*\*\*\*（企業名）サービスには二人の友達と一緒に受けにいきました。たまたま三人が受けるところが同じだけであって一緒に選んだわけではありません。みんな勤務地も違います。私はライバルとか、いやだなとはまったく思わず、なんか気が楽だったし、みんな受かればいいな—と思ったぐらいでした。」

「最初に会社説明会がありました。ビデオを見ましたが、バックの音楽がうるさくて、なにを言っているのかぜんぜん分かりませんでした。」

「試験が終わり、担当の方から、その会社の\*\*\*\*ドリンクをもらって、飲んで帰りました。あーやっと試験が終わった—。次は面接だ—。と友達と話をしながら帰りました。」

まだ「学生」そのもので、巣立っていこうとする覚悟が疑われる。もっとも、就職活動そのものが早すぎるという考えも成立するかもしれない。就職試験も、まだ期末試験が何かのように感じているのである。『あーやっと試験が終わった—。いよいよ夏休みだ—』と同じ響きを持っている。就職試験には、次のステップがないことに気づいていない。

「4日後の日曜日、試験の結果が手紙できました。残念なことに不合格でした。ゼミの時、先生に「落ちてもいいからどんどん受けてゆっくりやっつけていきなさい」といわれた時、それもそうだな—と思いました。受かるかどうかは分からないけど不合格でも落ちこまないで、どんどん受けているんな経験をしていきたいと思っています。」

「落ちてもいい」とは「受かる可能性は極めて低いのだから」という意味であり、「どんどん受ける」とは「落ちてでもめげずに次々挑戦する」という意味であった。また、「ゆっくり」とは「長期にわたって」という意味であったのだが、この学生は、上のように受け取ったのである。屈託のない性格とは、屈託しないように物事を受け取る習慣の結果なのであろう。この学生の棲み込んでいる協同体は、そうした破綻を解消する関係場であって、自律性を育む場にはなりえなかったということである。むろん、どこ家庭でも多かれ少なかれ、そうであって、子供たちの自律性の育成は学校教育に委ねられている。そして、当然そのようなことは商業主義に墮した教育産業の為しうるところではない。結局、この国では、こどもの自律性の育成は放置されているのである。

知というものを、自己の置かれている状況を的確に判断し、可想的自己の実現に向けて現

自己を変容させる精神の活動性であるとするれば、知の自律性というものは、そうした精神活動が身体化された姿である。状況把握の失敗が、協同体によって継続的に救済、ないしは曖昧化されることで、状況は自己の保全に都合の良い形でのみ把握されることになるし、また、生きる目的も、諸権力の勝手な思惑によって、絶えずそそのかされ、かつまた曖昧化されてしまう。また啓蒙によって、言葉は記号化し、その意味が希薄化する中で、知は発達の基盤を根こそぎ奪われてしまっている。

## ・ 啓蒙の欺瞞性

### 1. 啓蒙の転落

啓蒙とは、ベーコンの構想によれば、世界を呪術から解放することであり、神話を解体し、知識によって空想の権威を失墜させることであった。しかし、M. Horkheimer & T. W. Adornoによれば、それは、現代に奉仕して、大衆に対する全体的な欺瞞へと転身する<sup>4)</sup>。むしろ、いまわれわれは、彼らのようにファシズムの切実な脅威にされされているわけではないが、ここで垣間見てきた学生の苦しみの中にも、啓蒙の果たした負の役割を、はっきりと見ることができる。

ベーコンのプログラムは、科学的社会主義の幻想と同様に、科学的に見せかけるしか実行のしようのないものであった。科学は、「自然」の一部を原理に解体するが、そうした原理は、「不自然/非自然」しか再生することができなかった。しかし、そうした「不自然/非自然」も、産業社会の支配者にとっては、民衆を盲目にする格好の神話を提供してきたのである。

教育基本法（1947）第1条は、

「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家および社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神にみちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」

と謳うことによって、家族から子供たちを奪い、その親子ともども労働資源として社会に帰属させようとする野心を蔽い隠したのである。この荒唐無稽な条文も、子供の人格的完成を期待する大衆を騙す教育神話を構成している。

しかし実際には、学校教育はさまざまな弊害を生み出してきた。それは、親から子への知の伝承を断ち切り、親の家族内の立場を、全人格的な養育者から、たんなる経済的な養育者へと偏向させ、その結果、子供たちは、個にとって真に必要な知の訓練を受ける場を失ったのである。こうした場合は、主として農耕生活にあったのだが、日本の支配者たちは、ひたすら急いで、この国を、富国強兵・立身殖産の軌道に移行させようとしたのである。それは、1879年の教育令に始まるから、120余年もの間、その時々々の教育神話によって国民を騙し続けてきたことになる。農村の荒廃は、若者たちの心や知の荒廃と、同じ根を持っているのである。

夏目漱石は大正3年(1914)に、小説『こころ』の「中の七」で、次のように書いている。

「子供に学問をさせるのも、良し悪しだね。せつかく修行させると、その子供は決して宅へ帰って来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」

学問をした結果兄は今遠国にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟をかたくした。こういう子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとよりさびしいに違いなかった。

…自分が死んだあと、この孤独な母を、たった一人伽藍堂のわが家に取り残すものはなほだしい不安であった。それなのに、東京でいい地位を求めると言って、私を強いたがる父の頭には矛盾があった。私はその矛盾をおかしく思ったと同時に、そのおかげでまた東京へ出られるのを喜んだ。

ところで、こうした神話は、当初は啓蒙そのものから生みだされたものではなかった。それは啓蒙という隠れ蓑をまとして支配が作り出したものであった。しかし、そうした欺瞞がこれだけ長く続けられてくると、それはもはや啓蒙によって再生産されてきたと言うほかはない。なぜなら、啓蒙は、ここで例示したような事実、すなわち、教育基本法が目指したものと正反対の現実に立ち竦んで、まったく手をこまねいてきたばかりでなく、支配に媚びて、ますます大衆を疎外し続けているからである。われわれの為すべきは、こうした支配の走狗たる啓蒙を清算して、真に存在の存在性を立ち上げるための「新しい啓蒙の時代」を創造することである。

## 2. 神話の解体と普遍道徳

ある存在の心的形態の由来を把握することは、その心的形態それ自身の把握とともに、その存在性をより鮮明に浮かび上がらせる。しかし、それは当人にとっては、より心細い存在であることを暴露することにもなる。その結果、学生は焦って母親を非難・攻撃するかもしれない。しかしそれはたいていの場合、当人の立場を苦境に追い込むだけである。しかし、もし母親の心的形態の由来を把握することがあるとすれば、その学生にとって、母親の存在性を把握するのに役立つ、その結果、母親の受容に繋がっていくことになる。

こうした考察は、われわれに近代の過ちがどこにあったかを垣間見せてくれる。要するに、「その由来を把握すべし」という原理を得たとしても、その原理はけっして無制約的に成立しているものではないということなのだ。そうした自然の一部を原理に還元したとしても、その原理から再生される世界は「不自然/非自然」であるということが一般なのだ。これが技術の抱える根源的限界であり、技術と神業との決定的な相違である。この技術の弊害を克服するために必要なことは、存在性の把握、すなわち普遍道徳の実践であることは言を待たない。疎外が引き起こされ、放置されている処には、必ずや、その技術を無制約状態に解き放つ神話が存在している。疎外の存在証明によって、そうした神話を解体すること、それが普遍道徳の重要な役割である。これは、M. Horkheimer & T. W. Adorno の次の命題の対偶

をなすものである<sup>5)</sup>。

「啓蒙が神話へと退行して行く原因は、…、真理に直面する恐怖に立ち竦んでいる啓蒙そのもののうちに求められねばならない。」

・ おわりに - 事実は Vector として把握されねばならない

筆者は、『存在性の諸問題』<sup>6)</sup>中で、新しい啓蒙の時代を創造するための理論を、1つの Ecosophy という形で展開した。その論文の「 . 脱近代の道徳性」および「 . おわりに」において、「存在性の把握こそ普遍道徳とすべきことであり、普遍道徳を指さない教育は、知を空疎化する」ということを主張した。また、日米の情報格差については次のように述べた。「この情報格差は 対象をどれだけ存在として現象化しているかということの違いであり、普遍道徳に対する教育の誠実さの違いである。作文を書けない学生は、その不誠実さの犠牲者かもしれない」と。今回、報告した事例は、まさにこうした主張や疑義を裏付けるものであった。

しかし、次のような批判がなされうるのであることは想像に難くない。たしかに普遍道徳は、教育をいずれ再生させうるかもしれないが、その実践は、いまだ必要条件にとどまっていると。これは筆者の偽らざる思いでもある。苦しみを抱え込んだ学生の姿が、多少なりとも判ってくるということは、新たな教育実践の試みにとって、必要不可欠であることは否定できないが、それはまったく十分ではない。たとえば、ある事態が判明したとしても、その事態の意味、すなわち、その事態がいかなる問題を惹き起こすかということについては、必ずしも明らかではない。W. Köhler の、「事実は、ただ単に Scalar 的に在るのではなく、当為を指し示す Vector として在る」<sup>7)</sup>という教示は、やはり、事態を幅広くかつ運動として力動的に把握してはじめて可能になるのであって、そのために普遍道徳の実践の幅は、幾重にも拡大されねばならない。

この意味で、今回は、M. Horkheimer & T. W. Adorno の『啓蒙の弁証法』から多くの示唆を受けたことを感謝して銘記したいと思う。しかし、啓蒙を、諸権力の支配からは言うに及ばず、支配観からさえも解放して、普遍道徳のもとに帰属させなければ、啓蒙自体の再生はありえないということを主張して、筆を置くこととする。

## 註

1) (1), 序文 p .

2) (1) .

3) (2), p 223 .

「子どもは、安全や所属、自尊、愛情、尊敬や名誉を求める欲求がすべて満たされないうちは、自己実現に達することができない」。

4) (1) , p 55 .

5)この主張は次のような命題表現と同等である .

「啓蒙が、神話へと退行して行く 啓蒙は、真理に直面する恐怖に立ち竦んでいる」

この対偶は、次のように表現することができる .

「啓蒙が、真理に直面しようとする 啓蒙は、神話を解体する」

6)丸山 博道 , 存在性の諸問題 , 名古屋経営短期大学 紀要 42 , 2001 , pp 91-102 .

7)A. H. Maslow は ,その論文選集 (2) の第三部「価値」,第八章「事実と価値の統一」の中で ,Weitheimer , Köhler , Goldstein , Heider , Lewin , Asch などの多くの Gestalt 心理学者が , 事実は力動的なもので静的なものでないこと ,それらは scalar ではなく vector であること ( Köhler ,W. (1938) *The Place of Values in a World of Facts* . New York : Liveright ) を立証していると述べている .

## 参考文献

(1)Max Horkheimer and Theodor W. Adorno , *DIALEKTIK DER AUFKLÄRUNG Philosophische Fragmente* , Querido Verlag , 1947 .

徳永恂 訳 , 啓蒙の弁証法 哲学的断想 , 岩波書店 , 1997 .

(2)Abraham H. Maslow , *The Farther Reaches of Human Nature* , Viking Press , 1971 .

上田吉一訳 , 人間性の最高価値 : 誠信書房 , 1994 .

(3)名古屋経営短期大学 紀要 42 , 2001 .